

教育相談・生徒指導とカウンセリング —教育学部新入生の意識—

井上 清子*

Educational Counseling, Student Guidance, and Counseling: Attitudes of New Students Studying Education

Kiyoko INOUE

要旨 今後の教員養成に活かしていくことを目的として、教育学部心理教育課程新入生125人を対象として、教育相談・生徒指導・カウンセリングについてのイメージと、カウンセリングの授業を半年間履修後に感じたカウンセリング学習の望ましい時期や教職における有用性について質問紙調査を行った。認知度については、教育相談が一番低かった。教育相談と生徒指導が子どもを主たる対象として教諭が行っているのに対して、カウンセリングは、悩みを持った人を対象としてカウンセラーが行っているというイメージが強かった。また、教育相談やカウンセリングは話を聴いたり相談にのるのに対して、生徒指導は注意したり指導すると考えられていた。カウンセリングについては、すべての学生が、教職に役立つと回答した。望ましい学習時期については1年次が96.8%で、大学生活や将来に役立つので実践の機会を多く持つために早く始めた方が良いという意見が多かった。

キーワード：教育相談 生徒指導 カウンセリング 学校 教職

I はじめに

教育相談は、「一人ひとりの子どもの教育上の諸問題について、本人又はその親、教師などに、その望ましい在り方について助言指導することを意味する。言いかえれば、個人の持つ悩みや困難の解決を援助することによって、その生活によく適応させ、人格の成長への援助を図ろうとするものである」(文部科学省 1981)と定義されている。

その業務の組織、扱う内容・方法などによって、大きく4つに分けられる。1つは学校という公教育の組織内で行われている学校教育相談である。第2は都道府県市郡(区)教育事務所単位での教育研究所、教育センター、教育相談所(室)

で行われる教育相談である。第3は、児童福祉法による児童相談所および福祉事務所、少年鑑別所、家庭裁判所、地域の警察署、地方自治団体等が敷設する児童相談室、教育相談室、相談室等による教育相談である。第4は、民間の営利・非営利の個人もしくは団体による教育相談である。これらに共通しているのは、それぞれの施設で扱う対象や内容が幼児・児童・生徒・学生等の教育上の諸問題である点である。近年、教育相談は学校もしくは教育関係諸機関で行われる教育上の相談および指導に限定されて用いられることが多い。したがって、他の諸機関、施設で行われる相談は、児童相談、生徒・学生相談、家事相談、母子相談、福祉相談などとも呼ばれる。学校で行われる学校教育相談で扱われる教育上の諸問題と

* いのうえ きよこ 文教大学教育学部心理教育課程

して、①知的能力，学習能力，性格，個人的問題，②個人の行動障害—反社会的行動，非社会的行動，非行行為，悪癖，悪習慣，③集団非行，特別活動，④地域社会における生徒の集団指導などがあげられる。担当者については，校務分掌上多くの小学校では教育相談担当の教師，中・高校では教育相談，生徒指導，進路指導各担当の教師もしくは主事が広義の教育相談を担当している。さらに，学級指導，学級会活動などを含めた教育指導上の教育相談では，小・中・高校とも学級担任教師の果たす役割がきわめて広く大きい。（原野1979）

『生徒指導提要』（文部科学省 2010）では，教育相談は，「児童生徒それぞれの発達に即して，好ましい人間関係を育て，生活によく適応させ，自己理解を深めさせ，人格の成長への援助を図るもの」と示されている。一方，生徒指導は，「一人一人の児童生徒の人格を尊重し，個性の伸長を図りながら，社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」と示されている。教育相談と生徒指導の相違点として，「教育相談は主に個に焦点を当て，面接や演習を通して個の内面の変化変容を図ろうとするのに対して，生徒指導は主に集団に焦点を当て，行事や特別活動などにおいて，集団としての成果や変容を目指し，結果として個の変容に至るところ」が指摘されている。

生徒指導と教育相談の関係については，「車の両輪説」「教育相談中核説」「重複説」の3つが挙げられている。（嶋崎 2001）

文部科学省の「教育相談は生徒指導の一環として位置づけられるものであり，その中心的な役割を担うもの」という文言からは，児童生徒の個に焦点をあてた教育相談的關係を中心とし，その周りに集団に焦点を当てた生徒指導が成立するとも考えられる。

近年，学校では，複雑化した不登校，いじめ，校内暴力に加え，家庭の養育力や教育力の低下や児童虐待，少年犯罪の低年齢化，インターネット

問題など，児童生徒に関わる問題は，多様化・深刻化しており，従来の指導法のみでは対応できないケースがクローズアップされた。そこで，生徒指導や教育相談の基盤として，教師と生徒の信頼関係を重視し，共感的理解に基づいたカウンセリング・マインドを持って児童生徒に接することが全教員に求められるようになった。

2010年の教育職員免許法改正より，教育相談の中には「カウンセリングに関する基礎的な知識を含む」と記されている。すなわち，教師がカウンセリングの理論や技法に関する基礎的な知識を持つことで，児童生徒をよく深く理解し，より適切に接することや，専門機関と円滑に連携することが可能となり，学習指導・生徒指導等の両面において高い教育効果が期待できると考えられている。（中央教育審議会 1998）

新『中学校学習指導要領』解説（文部科学省 2008）では，教育相談に関して「すべての教師が生徒に接する機会をとらえ，あらゆる教育活動の実践の中に生かし，教育相談的な配慮をすることが大切である」「全教師による協力的な取り組みにより，全生徒を対象とし，すべての生徒の能力・適性等を最大限に発揮できるように勉めること」と示されている。一部の問題や悩みを持つ生徒から全生徒に，個別面接からあらゆる機会，あらゆる教育実践活動の中へと対象や場面は拡大していった。そしてその技法や理論については，臨床現場におけるカウンセリングの理論や技法をただ模倣するだけではなく，臨床におけるカウンセリングの理論や技法を学校現場の特性に応じて，工夫・創造していくことが必要であり，そのようなことができる教師を養成していくことが，大学に求められているともいえるだろう。

学校における教育相談・生徒指導・カウンセリングを比較検討した先行研究として，生徒指導と教育相談については，岩井（1991），藤田ら（1999）が教育大学生が持つイメージを調査し，中川ら（2015）が学習指導要領および生徒指導提要の分析を行っている。教育相談とカウンセリング

グについては、内田ら（1999）が、カウンセリングを活用した学校教育相談の在り方について、宮田ら（2009）が、学校教育相談とカウンセリング・マインドについて歴史的経緯をもとに検討している。

本研究では、教育相談・生徒指導・カウンセリングの三者について、教育学部新生が持っているイメージと、半期間の「カウンセリング」履修後に感じた、大学におけるカウンセリング学習の望ましい時期や教職における有用性意識について明らかにし、今後の教員養成に生かしていくことを目的とする。

Ⅱ 研究方法

1 対象

文教大学教育学部の1年生で『カウンセリング』を2017年度春学期に履修し質問紙調査に同意が得られた学生125人（男子25人、女子100人）を対象とした。

2 方法

（1）時期

2017年春学期開講の教育学部の『カウンセリング』（全15回）の初回授業の授業開始前に質問紙Ⅰを、最終授業で質問紙Ⅱを配布回収した。

（2）質問内容

質問紙Ⅰ：①フェースシート、②教育相談・生徒指導・カウンセリング、それぞれについての認知度（5択）と、行っている場所・対象・内容について（自由記述）。

質問紙Ⅱ：①フェースシート、②カウンセリングを学習することは教職に役立つと思うか（5択）、③教職課程におけるカウンセリングの授業は何年次に受講するのが良いと思うか（4択）とその理由（自由記述）。

Ⅲ 結果と考察

1 認知度

「大学で授業を受ける前のあなた自身の考えや経験について教えてください」と記し、教育相談・生徒指導・カウンセリングについての認知度を「①全く知らない」「②名前は知っている」「③名前と内容を少し知っている」「④内容についてよく知っている」「⑤体験したことがある」の5つの選択肢から当てはまるものの回答を求めた。その結果が表1である。

表1 教育相談・生徒指導・カウンセリングの認知度

	教育相談	生徒指導	カウンセリング
全く知らない	35人 (28%)	1人 (.8%)	3人 (2.4%)
名前は知っている	68人 (54.4%)	51人 (40.8%)	44人 (35.2%)
名前と内容を少し知っている	17人 (13.6%)	49人 (39.2%)	70人 (56.0%)
内容についてよく知っている	0人 (0%)	9人 (7.2%)	1人 (.8%)
体験したことがある	1人 (.8%)	9人 (7.2%)	3人 (2.4%)

（1）教育相談の認知度

教育相談については、「名前は知っている」が68人（54.4%）と過半数を超えて最も多く、次いで「全く知らない」35人（28%）が多かった。「名前と内容を少し知っている」は17人（13.6%）、「内容についてよく知っている」は0人、「体験したことがある」と答えた者は1人（0.8%）のみであった。

愛知教育大学2、3年生113人を対象とした岩井（1991）の調査では、教育相談について全体の22%が「わからない・無答」であったが、本調査では28%が「全く知らない」と回答し若干多かった。また、「教育相談を受けた経験がある」と回答したものは、岩井（1991）の調査では、約4分の1の25.7%であったのに対して、本調査では1人（0.8%）と少なかった。

岩井(1991)の調査では、対象学年が2, 3年生であったため、本研究の対象者である新入生よりは、「教育相談」という言葉を耳にする機会も多く自分なりのイメージが持てているため、教育相談を受けたことがあると回答したものが本研究より多かったものと推測される。

教育相談には、随時相談と定期相談があり、定期相談とは担任する学級の児童生徒に対して、定期的計画的に行う相談である。家庭訪問週間などを設けて行われる児童生徒・教師・保護者などによる三者面談なども定期相談に含まれる(高橋ら2016)。そのため、本来は、高校までの教育課程において、全員が教育相談を体験しているはずであるが、8割以上の新入生が、全く知らないか名前を聞いたことがある程度であることから、「教育相談」という言葉は、児童生徒の間では、あまり認知されておらず、使われていないことが確認された。

(2) 生徒指導の認知度

生徒指導については、「名前は知っている」が51人(40.8%)と最も多く、次いで僅差で「名前と内容を少し知っている」49人(39.2%)が多かった。「内容についてよく知っている」「体験したことがある」と回答したものがともに9人(7.2%)おり、「全く知らない」と答えた者は1人(0.8%)のみであった。

岩井(1991)の調査でも、生徒指導を受けた経験があると回答したものは、83.2%と教育相談に比べて高かった。本調査でも、全く知らないと回答した者は1名しかおらず、「生徒指導」という言葉は、教育相談に比べて、児童生徒の間でも認知されているものと思われた。

(3) カウンセリングの認知度

カウンセリングについては、「名前と内容を少し知っている」が70人(56%)と最も多く、次いで「名前を知っている」44人(35.2%)が多かった。「全く知らない」「体験したことがある」と回

答したものがともに3人(2.4%)おり、「内容についてよく知っている」と答えた者は1人(0.8%)であった。

スクールカウンセラーの導入などにより、カウンセリングも生徒指導同様、ほとんどの児童生徒に認知されているものと思われた。

2 認知の内容

(1) 教育相談のイメージ

教育相談の具体的なイメージについては、96名(76.8%)が自由記述をしていた。教育相談について「全く知らない」と答えた者は自由記述には未記入な者が多く、知らないために自由記述率が低くなったものと思われた。複数回答しているものについてはそれぞれの回答について1人と数えた。岩井(1991)の調査で、教育相談・生徒指導・進路指導のイメージの5件法での回答を比較し、教育相談が一番「どちらともいえない」という回答が多かったことから、教育相談は概念がはっきりしていないと解釈していた。

教育相談が行われている場所については、「学校」が圧倒的に多く87人(69.6%、記述者の90.6%)であった。児童生徒にとって教育相談は学校で行われるもの、あるいは内容はよくわからないが教育といえば学校だろうというイメージが強いことが推測される。さらに学校の中でも、教室が11人、相談室・専用の教室が9人、個室(二人きりの部屋)2人、職員室、話ができる場所が各1人、の記述があった。学校以外では、塾4人、役場(市役所)2人、病院2人、教育相談所、児童相談所、保健所、公共の施設、特定の施設、地区センター、設置された会場、各1人とそれぞれ少数であった。

教育相談を行う人については、「教師」が多く78人(62.4%、記述者の81.3%)であった。次いで人数は少なくなるがカウンセラー(またはスクールカウンセラ)が11人であった。その他は、専門家(教育の専門家、専門の知識がある人など)9人、職員5人、相談員3人、医師2人、教

育委員会の人1人など、いずれもイメージが漠然としている様子が伺えた。

教育相談を受ける人については、子ども（児童・生徒・学生含む）が69人（55.2%、記述者の71.9%）と一番多かった。次いで保護者（または親）が29人であった。その他には、教師6人、相談者2人、悩みのある人、患者各1人、であった。教師と記述したものが6人いることから、コンサルテーションやスーパービジョンのイメージを持つ者もいることが推測される。

教育相談の内容としての「何をどうする」の「どうする」では、その名の通り、相談と記述してした者が49人（39.2%、記述者の51.0%）が一番多かった。他には、話を聴く15人、解決策と一緒に考える11人、アドバイス8人、話し合う（話をする）6人、情報提供3人、指導2人、面談2人、教える1人であった。「何を」については、さらに記述した者が少なかったが、進路が31人と一番多かった。次いで教育、学校生活が各14人、勉強（授業、成績を含む）8人、悩み事8人、子育て5人、心のケア（心理含む）3人、友達関係2人、家庭1人であった。

教育相談については、児童生徒時代には、あまり認知されておらず、学校で教諭が行っている進路などの相談ではないかと推測している者が多い。岩井（1991）は、「教育相談に関しては、生徒としての経験からのイメージではなく、学生としての知識からのイメージが強く、全体として明確さを欠くきらいがあった」ことを指摘している。本研究でも、教育学部入学時の学生は、教育相談とは何を相談しているか、何が教育相談にあたるのかは、漠然としている様子が伺われた。

（2）生徒指導のイメージ

生徒指導の具体的なイメージについては、118人（94.4%）が記述していた。教育相談に比べて回答率が高いことは、認知度と関連があると思われる。複数回答についてはそれぞれの回答について1人と数えた。

生徒指導が行われている場所については、記述者全員が「学校」をあげていた。この中で、学内とともに学外をあげている者が10人いた（学内外、学校や周辺、学校を含めた生徒の行動範囲など）。学内では、生徒指導室との記載が13人と一番多く、次いで職員室10人、教室（空き教室含む）10人、会議室3人、体育館2人、校長室、個室、別室、人気のないところ、どこでも、が各1人であった。

生徒指導を行う人については、記述者全員が「教師」をあげた。その中では、生徒指導担当教師（生徒指導主任含む）34人、学年主任3人、担任2人と具体的に書かれていたものもあった。教師とともに保護者と記述していた者も1人いた。

生徒指導を受ける人については、記述者全員が「子ども（生徒含む）」をあげた。そのうち35人は、悪いことや校則違反、問題行動をした生徒（子ども）と限定している。生徒とともに保護者と記述している者が2人いた。

生徒指導は「どうするか」については、注意する・指導する（チェックする、指摘するを含む）が77人（61.6%、記述者の65.3%）と一番多かった。その他は、教える（助言する、説教するを含む）14人、直す（改善を促すを含む）13人、話す（話し合う）11人、叱る8人、怒る、反省させる各5人、罰を与える2人であった。「何を」については、不適切な行為（悪いことを含む）が一番多く29人、次いで生活態度（生活、態度それぞれを含む）26人が多かった。その他は、身だしなみ（服装、髪型含む）12人、ルール（校則含む）11人、善悪や必要なことが5人、あいさつ、学習が各2人、安全、進路、悩みが各1人であった。

生徒指導については、生徒指導室や生徒指導主任などの具体的な部屋や校務分掌が記述されており、記述者が各自の経験を元に記述していることが推察された。岩井（1991）の調査では、生徒指導という言葉から思い出すこととして「校則違反等のチェックのための検査・監視」に分類されるものを64%の者があげていた。そのほか、問題生

徒の個別指導，全校生徒あるいは学年全体に対する指導，体罰・没収など，もっぱら教師が生徒を取り締まる場面がでてきている。藤田ら（1999）も，「生徒指導には臨機応変な指導・援助が必要とされる。しかし，学生たちが受けてきた生徒指導の現状は，イメージ評定の結果に表れたように，どちらかといえば子どもたちの問題行動の指導に偏っていると考えられる」と述べている。本研究でも，生徒指導は，学校で教師が生徒（特に規則を守らなかったり，問題行動のある生徒）に注意，指導するイメージを持っている者が多かった。

（3）カウンセリングのイメージ

カウンセリングのイメージについても，118人（94.4%）が記述していた。複数回答についてはそれぞれの回答について1人と数えた。

カウンセリングが行われている場所については，「学校」と記述されていたものは65人（52%，記述者の55.1%）であった。一方，病院（クリニック含む）と記述されているものは35人（28%，記述者の29.7%）であった。

学校，病院以外の機関としては，専門の施設4人，会社4人，相談所1人，区役所1人などが少数見られた。所属がはっきりしない部屋としては，カウンセリングルーム10人，相談室7人，保健室5人，部屋7人（個室，専門の部屋，密室，二人きりの部屋，落ち着いて話せる部屋等）があげられていた。

カウンセリングを行う人については，「カウンセラー（スクールカウンセラー含む）」が圧倒的に多く99人（79.2%，記述者の83.9%）であった。その他は，教師（養護教諭5人含む）13人，医師7人，臨床心理士3人，相談員2人，専門家（資格を持った人，心理学のプロ等を含む）5人などであった。

カウンセリングを受ける人については，悩みを持った人（子ども，生徒含む）が61人（48.8%，記述者の51.7%）が一番多かった。次いで，子ども（児童・生徒・学生を含む）34人，患者（心の

病の人を含む）22人，などが比較的多数みられた。その他では，クライアント3人，保護者3人，教師2人，社員，一般の人，客，が各1人であった。

カウンセリングの内容では，話（悩み）を聴くが50人（40%，記述者の42.4%）と一番多かった。次いで相談（悩み相談，相談にのるを含む）が33人であった。解決策を一緒に考える21人とアドバイスをする（助言，解決策の提示を含む）18人は，話を聴くとともに記述されていることが多かった。他には，心のケア（気持ちのフォロー，治療含む）5人で，少数の意見が散在することは少なく，新入生が持っているカウンセリングの内容的なイメージはかなり共通しているものと思われた。

カウンセリングは，学校でカウンセラーが悩みを持った人に対して話を聴いたり相談にのったりするものというイメージを持っている者が多いことがわかった。

教育相談，生徒指導，カウンセリングとも学校で行われているイメージを持つ者が多いが，教育相談と生徒指導が子どもを主たる対象として知ることに対してカウンセリングは，悩みを持った人を対象としているというイメージが強く，教育相談やカウンセリングでは話を聴いたり相談にのることに対して，生徒指導では，注意したり指導すると考えられていた。

3 カウンセリングの有用性と学ぶ時期

（1）カウンセリングの有用性

カウンセリングの意義や基本的な理論や技法を学ぶ「カウンセリング」の授業15回終了後に，「カウンセリングを学習することは教職に役立つと思うか」という問いに5件法で回答を求めたところ，「全く役立たない」「あまり役立たない」「どちらともいえない」と回答した者はおらず，「やや役立つ」16人（12.8%），「とても役立つ」109人（87.2%）で，履修したすべての学生が，カウンセリングは教職に役立つと感じていた。

(2) カウンセリングを大学で学ぶ時期

カウンセリングの基礎的な理論や技法を学ぶのは、大学何年次がよいと思うかを、1～4年までの4択で回答を求めた。1年次が121人(96.8%)、2年次、3年次は各2人で、1年次と答えた者がほとんどであった。

その理由を自由記述で回答を求めたところ、117人(93.6%)から記述が得られた。

圧倒的に多かった理由としては『早く(早めに)学んだ方がよいから』99人(79.2%、記述者

の84.6%)であった。早く学んだ方がよい理由まで記述してあったものを内容別に4つにまとめたのが、表2～5である。一番多かったものは、『繰り返し実践(練習)することが必要だから』といった内容のものであった(55人)。「一朝一夕に身につくものではないから」「早いうちからなれておいた方がよいから」「練習する機会を多く作れると思うから」「応用や実践をする機会を作れるから」「1年で基礎、2年で発展、3年で実践の流れが理想的だと思うから」など、カウNSE

表2 1年次での履修が良いと思う理由<繰り返し練習することが必要だから>

<ul style="list-style-type: none"> ・実際に演習をしてみることで習得できるので ・早めに始めた方がより多く実践を積めるから ・カウンセリングをすることに慣れると思うから ・身につけるまで時間がかかると思うから ・早いうちから慣れておいた方がよいから ・実践を多く積んだ方がよいと思うので ・慣れておいた方が、きっと将来活かせると思うから ・何回も練習を経験することで良くなっていくと思うから ・2年以降で発展演習をしていくことが最適だと感じたから ・段階を踏むことに意味があると思うから ・4年間普段から意識して実践することができるから ・学年があがればあがるほど活用、実践できるから ・慣れてきて、卒業する際には問題なく行うことができるレベルになりやすいと思うので。 ・知識が1年からあれば、より多い実践の機会があると思うから ・学年があがればあがるほど活用、実践できるから ・1年次からやっていると、卒業する頃には問題なく行うことができやすいと思うので ・実践するのがなかなか難しいので、早いうちに知識を蓄えた方がよいと思うから ・実践することで身につくと思うので、1年の頃から基礎を学んでおくことが大事だから ・普段の生活の中でも練習しながら活かせるから ・カウンセリングをする力はすぐにつくわけではないので、早い段階から行うべきだと思うから ・沢山練習することができるのでスキルアップできると思うから ・基礎を学んだ上で実際にやってみることが大切だと思うから ・何度もやっておいた方が、やり方が身につくと思うから ・2年次からより実践的な練習ができるようになると思うから ・日常生活で活用したりして長い間実践的に使えるから ・繰り返し実践してから職場にでることで、より良いカウンセリングができると思うから ・2年時以降少しずつカウンセリングの技術を身につけていけると思うから ・大学の4年間、普段から意識して実践するため ・慣れるくらいになるには何回も練習する必要があると思うから ・早いうちに受講した方が多く使う機会があるから ・ぎりぎりになって学ぶより、1年時から少しずつ学び慣れていきたいと思ったから ・4年間かけて成長できる部分があると思うから ・練習する機会を増やせると思うから ・カウンセリングの能力は一朝一夕で身につくものではないから ・2、3年生ではカウンセリングの発展的な授業をすべきだと思うので ・少しずつやって行く方が4年でしっかりした技術が身につくと思うから ・1年で基礎、2年で発展、3年で実践、の流れが理想的だと思うから ・早いうちから学んだ方が沢山実践演習する機会があるから ・早いうちから練習することで確実に自分のものになると思うから ・早いうちから学んで自分自身にしみつけるのが一番良いと思ったから ・早くから実践的にできるのが良いと思ったから ・1年でしっかり勉強して、2、3年生になった時に実践して力をつけることが良いと思うから 	<ul style="list-style-type: none"> ・演習することでより身につくと思ったから ・応用や実践をする時間を作れるから ・1年のうちから慣れておくべきだと思うから ・すぐに身につくものではないから ・早めに慣れておいた方がよいから ・経験を積むことが大事だと思うので ・経験が必要だから ・練習することが必要だと思うから
--	--

表3 1年次での履修が良いと思う理由<大学生活で活かせるから>

- ・1年時にすることで友達ができ、仲が深まるから
- ・実習やボランティアに行ったときに役にたつから
- ・他の授業で応用できるから
- ・授業内でのコミュニケーションがクラスの仲間を知る助けになると思うから
- ・いろいろな場面で使えるから
- ・入学したばかりで友人ができる機会をカウンセリングの授業で多く得たため、今後の学校生活を過ごしやすくしてくれたと思う。
- ・大学に入っているいろいろな人と知り合っていく中でカウンセリングの授業で習ったことは、実際役立っているから
- ・カウンセリングを通してクラスの人とのコミュニケーションをとれ、クラスの皆で仲良くなりやすくなると思うから
- ・友達の輪を広げられるから
- ・最初のころにカウンセリングの授業でグループ活動を沢山したおかげで、見Pの人たちと仲良くなれたので、初めての出会いでカウンセリングの授業があると思った。
- ・1年で基本を学びエクササイズで話したことない人とも関わられるから
- ・生活にも早く活かせると思うから。
- ・話したことがない人と会話をすることができるきっかけになると思うから
- ・普段の生活でも役立つから
- ・2年生以降演習や実習で生かすことができると思ったから
- ・練習相手が変わるので、いろいろな交流ができるから
- ・カウンセリングの授業を通していろいろな人と友達になれたから
- ・友達との関わりなど生活の中でも活かせると思ったから
- ・4年間の実習、アルバイト、ボランティア活動で「カウンセリング」の観点からも物事を見られると思ったから
- ・日常生活などで役立つから
- ・友達から相談を受けた時などにも活かされてくると思うから
- ・別の授業で学んでいる心理系統の教科ともつなげて考えることができるため
- ・日常生活でも活用できるから
- ・日常生活や授業の中で活かせると思うから
- ・全ての生活においても使えるから
- ・他の授業にも役立つから
- ・他のことにも活かせると思うから
- ・他の学びにも活かせるから
- ・日常の生活で友達や人と関わっていく中でとっても役に立つから
- ・実習などでも生きると思うから
- ・授業で習ったことを使って人に話しかけ、そのおかげで友人を作れたので、カウンセリングの授業をやっておいて良かったと思っているから

表4 1年次での履修が良いと思う理由<将来に向けて役立つから>

- ・小学校の教師に必要なから
- ・教員になった時のことを思い浮かべることができるから
- ・将来、より本格的なカウンセリングをすることができると思うから
- ・教員になった時に役立つと思うから
- ・将来、子どもや保護者とカウンセリングをするにあたり大切だと思うから。
- ・就職した後のことをより具体的にイメージしてできるようになると思うから
- ・早いうちから興味を持てるから
- ・将来必要なことなので
- ・将来の視野も広がるから
- ・将来仕事をする上で必要なものになるので
- ・将来、保育士や幼稚園教諭になった時に必ず役に立つ分野だと思うので
- ・将来、とても役立つ分野なので
- ・保育士の基礎となる大事な力だから
- ・教師になる人にとってカウンセリングはとっても役にたつと思う
- ・将来保護者と関わることや生徒と接することで役立つと思うので
- ・役に立つことだと思うから
- ・保護者の支援に役立つと思うので
- ・保育士になるために必要な授業だから
- ・自身の将来について自覚をもつことができるから
- ・教育者の基礎として大事だと思うから

表5 1年次での履修が良いと思う理由<基礎的能力だから>

- ・コミュニケーション能力は大事だから
- ・相手とのコミュニケーションの取り方などを学んだ方がいいと思うから
- ・コミュニケーション能力も高まると思うから
- ・早いうちに基礎を身につけられるから
- ・コミュニケーション能力を早いうちから伸ばした方がいいから
- ・1年で基礎を学ぶべきだと思うから
- ・初歩だから
- ・どうすれば信頼関係を作れるのか、悩みや相談ができる環境を作れるのかなど、早いうちに学んでいくことが大切だと思うから
- ・他人とのコミュニケーションの取り方を知っておいた方がものの見方なども変わるから
- ・理解が深まると思うから
- ・早くから土台をしっかりとできるから
- ・1年のころから基礎を学べた方が良いと思うから

リングの基礎を学んだことで、教職に就いた際に役立てるためには、大学4年間でさらに段階を踏んで繰り返し学習・実践する必要性を感じた者が多かったといえるだろう。

『大学生活で役立つから』は31人で、「1年次にすることで友達ができ仲が深まるから」「普段の生活でも役立つから」「他の授業で応用できるから」「実習やボランティアに行った時に役にたつから」など、カウンセリングは、カウンセラーが悩みを持った人にするという入学時のイメージから、カウンセリングの基本的な技法や理論は大学生活でのコミュニケーションの促進や人間関係作りに役立つ身近なものとして変わったことが伺えた。

『将来に向けて役立つから』は20人で、「教員になった時に役立つと思うから」「教員になった時のことを思い浮かべることができるから」「保護者の支援に役立つと思うから」「教育者の基礎として大事だと思うから」など、カウンセリングをする側になって演習などをすることが、教育者としての自覚やイメージを持つ助けになるようであった。

『基礎的能力だから』は12人で、「初歩だから」「早くから土台をしっかりとできるから」「早いうちに基礎を身につけられるから」「コミュニケーション能力を早いうちから伸ばした方が良い」など、ここでもカウンセリングの基本技法は、コミュニケーションや人間関係作りの基礎や土台で

あると、授業を通して理解したことが伺える。

2, 3年次に履修した方が良いという理由は、「記憶がまだ新しい状態で仕事に臨めると思ったから」「就職した後のことをより具体的に思い浮かべられると思うから」などであった。

IV おわりに

教育学部新生125人を対象として、教育相談・生徒指導・カウンセリングについての質問紙調査を行った。教育相談は、生徒指導やカウンセリングに比べ知らない者が多かった。教育相談、生徒指導、カウンセリングとも学校で行われているイメージを持つ者が多いが、教育相談と生徒指導が子どもを主たる対象として教諭が行っているのに対して、カウンセリングは、悩みを持った人を対象としてカウンセラーが行っているというイメージが強かった

カウンセリングについては、カウンセリングの授業を履修したすべての学生が、教職に役立つと回答した。大学で学ぶ時期については、1年次が圧倒的に多く、大学生活や将来に役立つものなので繰り返し練習できるように早くやった方が良いという意見が多かった。カウンセリングはカウンセラーが悩みを持った人にするという入学時のイメージから、履修後には、コミュニケーションの促進や人間関係作りなど大学生活や教職で使える身近なものとして変わったことが伺えた。

今後は、今回の自由記述の結果を基に選択式の

質問紙を作成し、定量的・統計的な調査を検討していきたい。

引用文献

- 藤田正・清水益治・伊谷實（1999）教育大学生における生徒指導と教育相談のイメージ，教育実践研究指導センター研究紀要 8，101-108.
- 原野広太郎（1979）教育相談，依田新監修，新・教育心理学事典（普及版），金子書房，176-177.
- 岩井勇児（1991）生徒指導・教育相談・進路指導のイメージ，愛知教育大学研究報告 40，79-92.
- 宮田徹・水田聖一（2009）学校教育相談とカウンセリング・マインド—教育とカウンセリングの関係について—，富山国際大学現代社会学部紀要 1，59-70.
- 文部科学省（1981）生徒指導の手引き（改訂版）.
- 文部科学省（2008）新『中学校学習指導要領』解説.
- 文部科学省（2010）生徒指導提要，教育図書.
- 中川智之・森眞由美（2015）生徒指導及び教育相談の関係性から見た教職員の連携のあり方—学習指導要領及び『生徒指導提』の分析—，川崎医療短期大学紀要 35，79-87.
- 嶋崎政男（2001）教育相談基礎の基礎，学事出版.
- 中央教育審議会（1998）『新しい時代を拓く心を育てるために』—次世代を育てる心を失う危機—，「幼児期からの心の教育の在り方について」答申.
- 内田利広・海老瀬正純（1999）カウンセリングを活用した学校教育相談のあり方について（その2）—カウンセリングと学校教育相談の関連性をめぐって—，京都教育大学教育実践研究年報 15，275-297.